

# 序章

## 日米学生会議概要

## 第 65 回日米学生会議実行委員長挨拶

第 65 回日米学生会議実行委員長

竹内 正人

第 65 回日米学生会議のプログラムを企画し始めた昨年の秋、日米関係は普天間基地移設問題の迷走などにより停滞し、その一方で、日本の周辺海域においては竹島や尖閣諸島の領有権問題で政治的な緊張が高まっていた。このように東アジアの安全保障環境が急速に変容する中、日本はアジア太平洋地域においてどのような役割を自ら果たし、米国と共にどのように平和と安定を構築していくのか解決すべき課題が山積していた。

第 65 回日米学生会議は「共鳴から生まれる新たな可能性～個から社会、今日から未来へ～/Share, Respect, Reflect: Reimagining the Future Together」を総合テーマに掲げ活動してきた。自分とは全く異なったバックグラウンドを持つ者同士が、4 週間共に生活し成長してきたことを思うと今でも胸が熱くなる。独自の価値観に基づき自分の意見を持った参加者が、互いに相手の考えを理解するまでには多くの時間を要し、そのため議論は日々衝突や葛藤の連続であった。学生会議における議論は微力であり、その議論が社会に大きな影響をもたらすことは直ぐには望めないであろう。しかし、対話や議論を積み重ねることが、必ずや 10 年、20 年先の日米関係に変化をもたらすと信じ、些細な問題も差別せず、真剣に向き合い議論した。

第 65 回会議は日本で開催され、京都、長崎、岩手、東京の 4 都府県を訪れた。Share: 互いの意見を共有した京都サイト。Respect: 互いの考えを尊重し合った長崎サイト。Reflect: 自分達が行ってきた議論を振り返った岩手サイト。Reimagining the Future Together: 成果をまとめ、社会への発信に挑戦した東京サイト。各開催地では、その地域に特有な問題に焦点を当てた

プログラムが企画され、多くの人々と出会い、数々の得難い体験を積み重ねることにより、新たな絆を築くことができた。その絆は、今後人生を切り拓いていく上で大きな力となるであろう。またそれは日米学生会議の成果として世界のあらゆる場所で花開き、世界を動かす大きな力ともなるであろう。

**LIFE-CHANGING SUMMER.** 人生を変える夏。私自身、昨年日米学生会議に参加したことにより人生が変わった一人である。所属していた分科会の活動や会議のプログラムを積み重ね、様々な人と出会って行く中で「自分の人生を変えられた」ような感覚を得た。自分が経験したこの感覚を今年の参加者にも実感して欲しいと考えた。もちろん、人間一人の人生を変えることは容易なことではなく、また決して強要できるものでもない。今回の会議で参加者の人生が劇的に変わったかどうかは分からないが、少なくとも会議の場では、参加者は今まで以上に自分と向き合おうとしていたように思われる。この日米学生会議には、自分と真剣に向き合うことにより「今までの自分を変える」ことができる不思議な力が宿っていると思う。単なる学生会議に留まらない理由が、そこにあると実感している。

最後になりましたが、第 65 回日米学生会議開催に際し、多大なるご支援、ご協力を賜りました後援団体の皆様、ご賛助賜りました財団、企業の皆様、貴重なご講演をして頂いた講師の皆様、日頃から大変お世話になった一般財団法人国際教育振興会、ISC の皆様、そして現役学生の活動を支えて下さった OB・OG の皆様、そのほか様々な形でご支援、ご協力を頂いた全ての皆様にこの場をお借りして心より御礼申し上げます。

## 日米学生会議の歴史

日米学生会議は、1934年、満州事変以降悪化しつつあった日米関係を憂慮した日本の学生有志により創設された。米国の対日感情改善、日米相互の信頼関係回復が急務であるという認識の下、「世界の平和は太平洋の平和にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。その一翼を学生も担うべきである。」という理念が掲げられた。当時の日本政府の意思と能力の限界を感じた学生有志は、全国の大学の英語研究部、国際問題研究部からなる日本英語学生教会(日本国際学生協会の前身)を母体として、自ら先頭となって準備活動を進めていった。資金、運営面で多くの困難を抱えながらも、4名の学生使節団が渡米し、全米各地の大学を訪問して参加者を募り、総勢99名(うち22名は大学教授、およびその夫人でオブザーバー)の米国側代表を伴って帰国した。こうして第1回日米学生会議は青山学院大学で開催され、会議終了後には満州国(当時)への視察研修旅行も実施されるに至った。

日本側の努力と熱意に感銘した米国側参加者の申し出によって、翌年第2回日米学生会議が米国オレゴン州ポートランドのリードカレッジで開催され、以降1940年の第7回会議まで、以下の通り日米両国で毎年交互に開催されることとなる。第3回(1936年)早稲田大学。第4回(1937年)スタンフォード大学。第5回(1938年)慶應義塾大学。第6回(1939年)南カリフォルニア大学。第7回(1940年)津田塾大学。しかし、太平洋戦争の勃発に伴い、日米学生会議も中断を余儀なくされた。終戦後、会議復活の声が上がり、当時の学生とかつての参加者の努力により、日米学生会議は1947年に再開し、第8回を迎えることとなった。しかし、当時日本は占領下にあり、米国から学生を招くことが不可能であったため、在日米兵および軍属の中から、大学生の資格を持った者を選んでの会議再開であり、1953年の第14回会議まで日本で開催された。翌1954年、第14回会議に参加したコーネル大学の学生の提案により、第15回会議が戦後初めて米国の同大学で開催されることが決定した。しかし、当時の日本の経済状況では、日本側参加者の渡米費用を捻出することは容易ではな

く、米軍の輸送機の提供を受け、15名のみの日本側参加者が参加するに留まった。

これがきっかけとなり、日本に留まった参加者の中から「2国間関係のみならず、多国間での学生による交流が行われるべき」との声が強まり、日米学生会議を国際学生会議に発展的に解消することが決定され、同じく1954年、アジア地域の学生との会議を主目的に、第1回国際学生会議が開催されることとなる。なお、国際学生会議は現在も、関西地方を中心に、各国から学生を招集する形態で継続されている。一方の日米学生会議は、この決定により、1954年を以って、再び中断されることとなった。

1963年に至り、翌1964年が第1回会議創立の30周年に当たることもあり、日米相互開催の形で会議再開を望む声が高まった。これを受け、第1回会議創始者が多数の理事を務めていた財団法人国際教育振興会が日本側主催者として責任を取ることで会議を再開することが決定された。第1回及び第2回の米国側参加者の努力もあり、1964年、日本側参加者77名と米国側参加者62名による、第16回会議が実現し、ゆかりの深いリードカレッジで開催されることとなった。1964年は、東京オリンピックが開催された年でもあった。その後、日米相互開催の下、会議は継続されるが、1973年第25回会議において、当時の学生によって抜本的な改革がなされ、現在の会議の基本形態が整備されることとなる。それは主に、限られた日程の中での議論をより効率的かつ集中的に行うために、毎年の会議ごとにテーマを設定する、期間を1ヵ月間とする、などである。円が変動為替相場制に移行し、米軍が南ベトナムより撤退した1973年でもあった。1978年には、戦前の日米学生会議参加者有志により、会議の継続に必要な経済的支援を主目的とする、国際教育振興会賛助会が設立され、会議永続への道が開けることとなった。また、次いで第31回会議が開催された1979年には、米国においても戦前の参加者によりJASC,Inc.が設立され、米国側実行委員会をサポートする体制が確立された。

その後日米学生会議は、財団法人国際教育振興会と JASC,Inc.の協力の下、日米両国学生が主体的に企画・運営を担うという形態をとる中で、継続されることとなる。そして 2007 年度にアメリカ側支援団体である JASC, Inc. は ISC, Inc.(International Student Conference)と名前を変え、他国との学生会議開催も視

野に入れ始めた。創設時と今日では日米両国を取り巻く環境は大きく異なり、会議の形態自体も変化している。現在の日米学生会議は、会議創設時の理念を受け継ぎつつも、時代の変化に対応し、今日に至っていると言えよう。

## 本文中の略語について

- JASC(ジャスク) :日米学生会議(Japan-America Student Conference)の略。
- JASCer(ジャスカー) :日米学生会議参加者を指す。
- IEC :日本側主催団体である国際教育振興会(International Education Center)の略。
- ISC,Inc :アメリカ側主催団体である International Student Conferences ,Inc の略。
- EC :実行委員会、または実行委員 Executive Committee の略。
- AEC :米国側実行委員会 American Executive Committee の略。
- JEC :日本側実行委員会 Japanese Executive Committee の略。
- デリ、デリゲート :日米学生会議参加者、Delegate。
- ジャパデリ :日本側参加者。
- アメデリ :アメリカ側参加者。
- アラムナイ :日米学生会議の過去の参加者。
- サイト :本会議開催地の意味。
- RT :参加者がいずれかに必ず帰属する分科会のこと。Round Table の略。
- リフレクション :参加者が会議の感想や反省点を話し合う場。